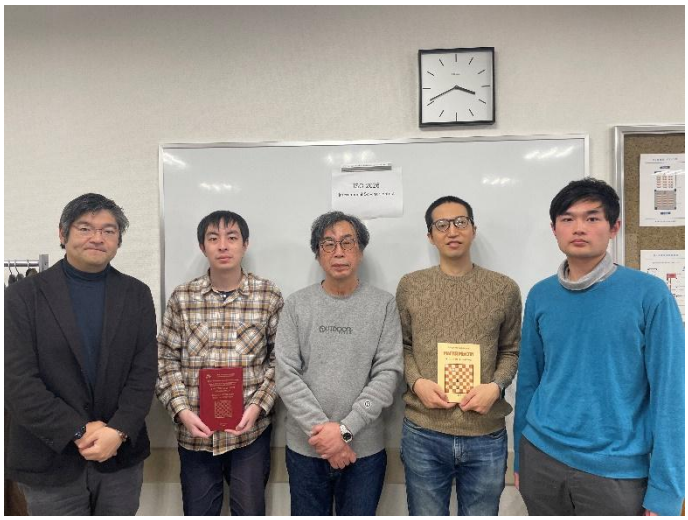
第 22 回 International Solving Contest

１月 26 日に第 22 回 International Solving Contest (ISC)が東京都江東区の東大島文化センターにて開催されました。参加者数は 28 名（カテゴリー１が 16 名、カテゴリー２が８名、カテゴリー3 が４名）でした。優勝はカテゴリー１が若島正さん、カテゴリー２が新井大輔さん、カテゴリー３が秋山海璃さんでした。優勝されたみなさん、おめでとうございます！

今年の ISC は世界 26 ヵ国で同日開催され、総参加者数は過去最高となる 952 名を記録したそうです。日本での参加者数も、インド（383 名)、ロシア（110 名)、セルビア（78 名)、ルーマニア（67 名)、ポーランド、モルドバ（各 30 名）に次いで７番目の参加人数で、日本もソルビングチェス大国になりつつありますね！？

各カテゴリーの入賞者の方々



カテゴリー１

カテゴリー２

カテゴリー３

結果

category 1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	Pts	Place
若島正	0	5	4	2	1.5	0	5	5	2.5	1.5	-	-	26.5	1
黒川　智記	5	0	3.5	0	5	-	0	5	0	1	-	0	19.5	2
南條遼介	5	0	-	5	-	-	5	-	0	4	-	-	19	3
中村龍二	5	0	0	1	-	-	5	5	0	2.5	-	-	18.5	4-5
太刀岡甫	0	-	2.5	-	1.5	-	5	4.5	0	0	5	0	18.5	4-5
鈴木　知道	5	-	-	2	3.5	0	5	0	-	2.5	-	-	18	6
真鍋　浩	5	2.5	-	0	1.5	0	0	3.5	-	2.5	2.5	-	17.5	7
小林敏樹	5	-	2	-	1.5	-	5	0	-	0	2.5	0	16	8
塩見　亮	0	0	-	0	3.5	-	0	5	-	1.5	2.5	-	12.5	9
前嶋啓彰	0	0	0	0	-	0	5	0	0	1	-	3	9	10
Alexander Averbukh	5	0	-	1	-	0	0	-	0	1.5	-	-	7.5	11
松永冬馬	0	0	0	0	1.5	0	0	-	0	2.5	0	0	4	12
中嶋正和	0	0	0	0	1.5	-	0	-	-	1.5	-	0	3	13
Masashi Aso	0	0	-	-	-	-	0	0	0	1.5	-	-	1.5	14-16
Chong Wing Hei	0	0	-	-	-	0	0	0	-	1.5	0	-	1.5	14-16
Srivatsa, Sirimala	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.5	0	0	1.5	14-16

category 2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	Total	Place
新井大輔	5	5	-	-	-	3.5	5	0	-	-	-	-	18.5	1
井上 聡美	0	0	-	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2
東　城一	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	3-5
Hudimowa Sofiia	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	1	0	1	3-5
籠谷綾子	-	0	-	-	-	0	0	-	-	-	-	1	1	3-5
橋本まい	0	0	-	-	-	-	0	-	-	-	-	0	0	6-8
佐々木真理	0	0	-	-	-	0	0	0	-	-	0	-	0	6-8
ワタナベ ティマフェイ	-	0	-	-	-	0	-	0	-	-	-	-	0	6-8

category 3	1	2	3	4	5	6	Total	Place
akiyama kairi	5	5	5	5	-	3	23	1
北原史寛	0	5	0	5	0	-	10	2
akiyama kanata	5	0	0	0	-	-	5	3
野村梨紗	0	0	0	0	0	-	0	4

カテゴリー１とカテゴリー２の優勝者の若島さんと新井さんの大会参加記です。

ISC 参加記
若島正

ISC が 2005 年に初めて開催されてから、20 年務めてきた責任者の役目を、昨年にようやく引き継ぐことができて、カテゴリー１に参加しました。ところが、#2 で間違えるという大チョンボをやらかしたせいで、５割（30 点）にも満たないという体たらく。そういうわけで、今年の目標は#2 を間違えないこと、そして５割を取ることの２つでしたが、なんたることか、今年も昨年と同じ結果に終わり、つくづく歳はとりたくないものだと思い知らされました。ただし、MatPlus に出ている暫定結果を見ると、カテゴリー１の最高点は 47.25 点と見たことがないような低さで、あの Murzia ですら 38.25 点でしたから、今年はよほど難しかったのでしょう。

振り返りの代わりに、参加者にとって有益な情報になるように、カテゴリー１、２、３のそれぞれから１題ずつ選び、その解き方のコツを書いてみたいと思います。少しでもお役に立てば幸いです。

◆カテゴリー１　９番

Hans Peter Rehm

9th place 6th WCCT, 1996-2000

#5　　13+12

図を眺めていると、

1.Sb4+ axb4 2.Se3+ Kxc5 3.Sc2+ Kd5 4.Sxb4♯??

1.Sxc3+ Sxc3 2.Se3+ Kxc5 3.Sd1+ Kd5 4.Sxc3♯??

という筋がすぐに浮かんできました。これはいかにも作意に出てきそうな仮想手順です。

作意に出てきそうな、捨駒を含んだ仮想手順は、必ずなんらかのかたちで作意手順に出現します。

先ほどの仮想手順で、最初の順は Bf8 のラインが生きていると、4…Bxb4 で詰みません。２番目の順は Rc8 が生きていると、4…Rxc3 で詰みません。逆に言えば、**仮想手順が実現するためには、Bf8 のラインを切る手（...d6）や Rc8 のラインを切る手（...Bc6）が、必ず白の初手に対するディフェンスになるはずです。**

さてそれでは、白のキーは何でしょうか？

仮想手順が実現するためには、白の RBBS はその形を崩すことができません。また、同じく、a-f の白の P も、仮想手順に必要です。

つまり、**白のキーは原形のままで動かせない RBBSP 以外の駒を動かすはず**で、それには K しかありません。それは 1.Kg4!のはずです。

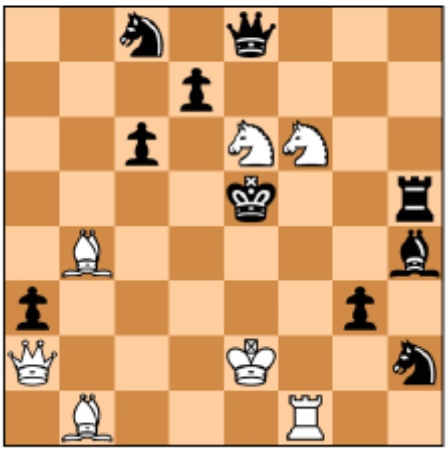
次の問題は、1.Kg4!にスレットが付いているか。それに気づくのにしばらく時間がかかったのですが、スレットは 2.Bd3 ― 3.Bc4+ Ke4 4.Sf2♯です（実は、この順で 2…Bxc5 3.Se3+ Bxe3 4.Rd6+ Kc5 5.Bxe3♯の変化があることは読んでいたのですが、なぜかこれを４手と勘違いしたために、書き忘れてしまいました）。

このスッレトに対するディフェンスとして、1…d6 と 1…Bc6 があることを確認して、解けたと思ったわけです。1…Bb7 もディフェンスになることを読み落としていたのは残念でしたが、すべての変化を丹念に拾いあげることは、おそらく誰にとっても難しいはずです。わたしとしては、とにかく本筋が解けただけでもよしとしなければなりません。

◆カテゴリー２　１番

Arthur M. Sparke

2nd prize The Western Daily Mercury, 1915 (v)



#2　　7+10

カテゴリー２、３も、出題のレベルが毎年上がっていて、見た目にもすぐ解けるようなものは出てていません。なかなか大変ですが、♯2 だけにしぼって解説してみます。

♯2 でまず注目すべきは、黒 K の逃げ道です。具体的には、黒 K の周囲の８マスです。なぜなら、♯2 の範囲だと、黒が指せる手は１手だけなので、黒 K はその８マスにしか逃げられないからです。この問題の場合だと、黒 K の周囲８マスにはすべて白の駒が利いています。この利きのことを、専門用語でガード（guard）と言います。

黒の着手で、白が心配するのは、黒 K の周囲８マスにいる駒を取られる手、つまり 1…Qxe6 と 1…Bxf6 です。Se6 は Qa2 が、また Bf6 は Rf1 がガードしていました。逆に言うと、**もしその駒を黒が取ってくれたら、白の Q や R はもうその地点をガードする必要がなくなります。**黒 K は、その地点には自分の駒があるので行けません。これを専門用語でセルフブロック（selfblock）と言います。つまり、**1…Qxe6 には白は Q で詰まし、1…Bxf6 には R で詰ませればいいことになります。**実際、1…Qxe6 には 2.Qa1♯のメイトがあります（元いた Se6 は d4 をガードしていたので、詰ます場合はその d4 から e5 を結ぶ斜めの線で詰ませる必要があるのです）。その一方で、1…Bxf6 には現在のところ R で詰ませる手がありません。元いた Sf6 は e4 をガードしていたので、詰ます場合はその e4 から e5 を結ぶ縦の線を使って

R で詰ませる必要があります。それは 2.Re1＃のはずですが、白 K の立っている位置が邪魔になっているので、キーとして浮かぶ候補手は 1.Kd2 か 1.Kd1 です。

ところが、1.Kd2?は、次に詰ませるよ、というスレットが付いていません。それに対して、1.Kd1!は放っておくと 2.Qe2＃というスレットが付いています。そこから、1.Kd1!が最終的に正解だとわかるのです。

◆カテゴリー３　４番

Jorge Marcelo Kapros

4th HM Boletim da União Brasileira de Problemistas, 1988

#2　　8+11

この ISC の＃2 では最もよく出題されるタイプ。カテゴリー１の専用かと思っていたのですが、これがカテゴリー３でも出題されるようになったのですから、大変ですね。

問題図で、白の Se4 がどこかに動いたとしましょう。そうすると、次は 2.Be5＃で詰むという、スレットが付いています。そこで、**S をどこに動かすのが正解ですか？**というのが問題です。S を動かせる場所は７通り。そのうちの１つだけが正解になります。こういうタイプの問題を、専門用語でコレクション（correction、つまり「修正」）と言います。

こういうタイプの問題では、**S をどこかに動かしたとき、その駒が邪魔になる、**という仕掛けが一般的です。つまり、**それを修正して、邪魔にならないような場所に S を動かせばいいことになります。**

S をどこかに動かす、というときには、盤面から S を取り除いて考えてみましょう。2.Be5＃のスレットに対しては、それを受ける方法が 1…Sc4、1…exf6、1…Sf7、1…Sg6 の４通りあります。そのときにどう詰めるかというと、

1…Sc4 2.Qxd4＃

1…exf6 2.Qd6♯
1…Sf7には、次の詰みがありません
1…Sg6 2.Bg5♯
となります。
　そこで次の問題は、**1…Sf7に対して詰む手を用意する、最初のSの行き場所は？**ということになります。その詰み形は2.Sd5♯か2.Se6♯なので、そこに行ける最初の移動場所は1.Sc3、1.Sc5、1.Sg5の３通りですね。このうち、1.Sc5?は1…Sc4!で失敗（2.Qxd4♯??が指せません)、また1.Sg5?は1…Sg6!で失敗（2.Bg5♯??が指せません)。ということで、残った1.Sc3!が正解になります。

大会参加記

2026/2/2
新井大輔

　詰将棋の世界から、チェスプロブレムの世界に足を踏み入れた。実戦を指したことはなく、駒の動かし方を知っている程度。きっかけは昨年夏の詰将棋全国大会での藤原俊雅さんとの会話。やってみようかという気になってくる。若島正先生のWEB講座を受講し始めたのが10月、既に2年以上進んでおり、過去のアーカイブを観ながら勉強する。詰将棋とは似て異なる世界で、クイーンやナイトの駒の動きに手こずり、ポーンの向きに混乱するも、詰将棋では決して現れない新鮮な応酬に驚きを覚える。藤原さんのシナトラnoteも並行して鑑賞、Sam Loyd、Otto Wurzburg、Abdurahmanovic・・・チェスの世界にも凄い作家がいて、魂が震える作品に何作も出会う。もともと、詰将棋創作の幅を広げようと学び始めたチェスプロブレムなので、解答競技に出るつもりは全くなかったが、ものは経験、詰将棋の先輩方に会える機会でもあるので、〆切直前にISCに申し込む。出るからには1点でも多く取ろうとの思いから、カテゴリー2の過去問を解きはじめるが難しい。私が手を出せそうなのはH#2と#2くらいで、あわよくばS#2もという作戦、それでも難儀する問題ばかりで全滅に近い年も。付け焼刃の勉強では通用しないなと思いつつ、当日を迎えてブルーな気持ちで会場へ。

　会場に着くと多くの方がチェス盤を何面も並べていたりと臨戦態勢。時間が来てRound1が開始。久しぶりに受験生のような気持ちになる。私の隣で小さな子供たちがカテゴリー3に取り組む。未来の藤井聡太さんが生まれると嬉しい。出題作をぐるっと見て、ヘルプだけは落とすまいとH#2の6番から考える。白の駒は少なくメイトは限られそうだが、しばらく考えると黒Kがe5、d6と進む解が見える。答案に書けそうな解が一つでも見つかるとほ

っとする。しかし、後の2解がなかなか見えない。3.sol なので関連性を考えて、黒Kが右上に進む筋を読むが、2手で詰む形が見つからない。堂々巡りで時間が過ぎ、1番の#2に移る。Qe2 とチェックをかけると詰み形があるので、さほど時間をかけずに Kd1!は発見できた。苦労したのは2番の#2。白と黒のQが互いにピンされている緊迫感のある初形。白Qのペレムーブや白 K のライン退避を長時間思案するが、これと思ったキーが次々つぶれていく。となると下辺の白 R や S を動かす手か？と考えているうちにどんどん時間が経過。万策尽きてヘルプに戻ろうかと思った時、右上の白 B を動かす手を読んでいなくことに気づく。そこで見つけたのが Bh6!、黒Qに白Qを抜かれても S で取り返した形がチェックメイト。まさかのピン外し！他の応手は読まなかったが、これしかないはずと思い答案用紙に書いてヘルプへ。残り時間は30分、何としても後2解を見つけたい。白Qを d5 に運び、黒駒で g6 を塞ぐ手順を読むが2手ではダメ。そうこうするうちに白Qを h5 に運ぶ解を何とか発見する。残るは解一つだがここで時間切れ。すぐに正解用紙が配られるが、最後の解はQが a5 に飛び出るバッテリー形成で、P のダブルステップが全く見えていなかった。しかしながら、取り組んだ3問で記入したところは全て正解となり、私にしては願ってもない出だしとなった。

昼食休憩中に、私と同じくチェス講座を受講されている女性の方が 3 名来られていてお話することができたのが憩いの時間。文学つながりでチェスプロブレムに入ってこられた方もおられる。人生、何がきっかけになるかが分からないのが面白いところ。

昼食休憩後から Round2。Round1 より解けないことは過去問を見て分かっているので、何とか S#2 に食らいつき、あわよくば#2 もというプランで進める。しかし、S#2 は経験不足でどうも解らしきものが見えてこない。Bb4 がいなければ Qd1 以下白Kが詰むので、B を動かす手は読むものの、場所が特定できない。Bf8 が正解なら面白いと妄想するが、意味不明の手で終わってしまう。何も書けないまま30分以上が過ぎ、7番の#2に移る。複雑で読みにくい形、沢山の守備駒が遠くから睨んでいる。詰将棋的なアプローチで最初に考えたのが最も基本的な手筋である焦点の捨て駒で Qe5 や Qf6 という手。しかし、守備ラインが減ったところで、メイト形にはならない。視点を変えて考えているとどうも Sc3 を動かす問題に思えてくる。最初に見えたが Sb5 で、次の Rc3 と Ra4 を両方受ける手はなさそう。過去問でしくじった経験から、#2 で間違うのは黒の応手を洗い出せていない時なので、応手を慎重に紙に書き出す。Bxb5、Sxb3、Sxb5、Sxf5、Ra6、いづれも詰む。どうもこれがキーのようだ、少しはトレーニングの成果があったかな、と安堵していると、白駒を取らない Sdc2 という応手があるではないか・・・がっくし。気を取り直して読み直す。しらみつぶしに調べていくと Se2 という手がある。何だかぼんやりした手に見えるが、Sxe2 なら Rxc5 で詰むことにきづく。Sxb3 は Bxb3 と取り返せばよい。この時間帯になると Round1 からの疲労の蓄積で頭はオーバーヒート状態、他にも応手はありそうで自信はなかったが集中力が続かず解答

用紙にSe2!と書いてしまう。残り時間は20分くらいだったか、S#2に戻るが相変わらず見えないので、気分転換に駒数の少ない8番の#3を眺めてみる。意味ありげなh筋の配置。直感的にQかPがh4に飛び込んで黒の態度を聞く手が見える。しかし、続く展開が分からない。Kb5とにじり寄って包囲網を狭めたいがc6+と応じられるとKを逃げるしかない。Qa4というソッポに行く手が見えて、詰将棋的にも面白い手なので、この線で解答用紙に書いているうちに時間終了。結局、8番の正解はQh4!で最初の直感のほうが正しかった。幸いにも読み切れないまま書いた7番のSe2!は正解しており、Round2でも得点することができた。自己採点ではRound1、2を合わせて18.5点。後半戦は失速したものの、自分の今の力は出し切れたと思った。

4時間にわたる解答競技が終了し、疲労困憊、何も考える気がしない。人生でこんなに長時間集中したのはいつ以来だっただろうか。一方で解答競技にも出られた方々が採点や集計を黙々と進めておられる姿には頭が下がる。集計がまとまり結果発表、 何と私はカテゴリー2の部門で優勝、1ミリたりとも予想していなかったので驚くばかりだが、何はともあれ嬉しい。カテゴリー1の若島先生と並んで優勝とは何とも美味しいところをいただいてしまった。その後は若島先生がカテゴリー2の問題解説。ヘルプで私が最初に見えた解は筋悪の手とのことで、やはりそうかと苦笑い。しかし、物は考えようで筋悪の複数解で一局作るのも面白いではないかと考えてしまう。解説が終わるころにはほど良い時間となり、大会は無事に終了。運営の皆様には深くお礼を申し上げます。

実は競技大会よりも楽しみにしていたのが懇親会。今年は詰将棋作家の参加が少なめだったものの、私にとっては雲の上の存在である若島先生や小林敏樹さんとお話できたのが至福の時間。プロパラ担当者の方々やチェス対局の日本チャンピオンの方々など、全ての方が初対面なのに、話がはずむのに時間はかからない。多岐にわたる面白い話ばかりで、あっという間に時間が流れる。3次会の途中まで参加して、後ろ髪を引かれる思いで帰路につき、一週間を詰め込んだような一日が終わった。

さて、以上が大会当日の様子ですが、過去問や当日の出題作を必死で考えていると、面白げな妄想手順がいくつか浮かんでくる。これを作意として作品ができたら、と思考が明後日の方向にいってしまうことが何度かあった。解いても鑑賞してもプロブレムは十分楽しめるが、私はやはり作品を創ってみたい。解くことから創ることに一歩を踏み出した時、それがどんなに稚拙でささやかなものであっても、自己表現の世界へと変わる。創作が大変なことは詰将棋で分かっているが、自分の物語が形になった時の喜びは何物にも代えがたい。プロブレムの作り方はまだ全く分からないが、いつの日かプロパラ誌に自分の作品が載ることを夢見て大会参加記の結びとします。